

夢がある だから生きてゆく

2 SCENE

スモーキー・マウンテンを歩いていくと、奥の方にひととき高くごみが積まれた山があり、その周辺に霧が立ち込めているように見えました。さらに歩を進めると、それは霧ではなく、ごみが自然発火で燃え、煙が出ているのでした。

こんなにもごみが燃えている...。立ち込める煙を見ていると、私の足下から炎が上がり、そのときは本当に驚きました。

その煙を避けるようにして、子どもたちが裸足でごみの山を歩いていました。ゴム草履を履いている子どももいましたが、ほとんどは裸足です。

「ヤケドしちゃうよ。燃えているから熱いよ！」
私は彼女たちを見て、思わず声を出してしまいました。すると、二人は私にほほえみ、そしてまた自分たちの「仕事」に戻りました。棒をしっかりと握り、大きな袋をかついでいる子どもたち。この棒を鎌のように使って、ごみの間から鉄くずやアルミニウムといった売れるものだけを探しているのです。これがこの子どもたちの唯一の生きていく術なのです。

集めたものをリサイクル業者に渡すと1ドル(約90円)ほどになるというのですが、一日中こうしてごみをあさり、大きな袋をいっぱいにしても、90円にしかなりません。生きていくには、決して多くはないお金だけれど、子どもたちは一生懸命探していました。目をこらさないと見つけれないほどの、小さな小さなアルミくずまで。

危険なここでの作業により、子どもたちの中には足を傷つけて破傷風になったり、感染症になって死んでいく子も多いのです。捨てられた子どもも多く、孤児が孤児を育てていたり、ほかの親が孤児を育てていたり...。アフガニスタンでも、子どもが子守をしている風景が当たり前でしたが、カンボジアのスモーキー・マウンテンでも、力を合わせて生き抜こうとしている風景を目にしました。

ここに集まってくる子どもたちは、親の度重なる暴力から逃げたり、親が破産をして捨てられたり、親が殺されたりなどの事情でここにたどり着きました。そして、一日一日をここで懸命に生きています。でも、みんな「学校に行きたい」「勉強したい」と言っています。カンボジアでは学校が不足しています。小学校も、中学校も。そして、孤児院も。

私は彼らを見ながら、その夢を1つでもかなえてあげることではできないかと考えはじめました。



ふじわら・のりが 女優。兵庫県出身。ドラマ、CM、司会などで活躍。主な作品は「スタアの恋」「大奥～華の乱～」 「愛と青春の宝塚」(フジテレビ)、最近では「ツレがうつになりまして」(NHK)で鬱病の夫を支える妻を好演。過酷な環境の中で働く産科医をテーマにした連続ドラマ「ギネ 産婦人科の女たち」(日本テレビ)で主演を務め、新境地を開いた。2002年、日韓国民交流年で親善大使を務める。戦乱で傷ついたアフガニスタンをとらえた写真展を04年

6月にニューヨーク国連で開催、その際アナン元事務総長に面会し、スピーチも。以降、国際活動を本格化。各地でチャリティー写真展「Smile Please!」も開催。現在は赤十字広報特使として、各国を訪問。今月10日には今の心境と美の秘訣をつづった「紀香パティ! 2 リ・アル」を発売。来年1月7日からは、ブロードウェイミュージカル「キャバレー」(東京・有楽町の日生劇場、1月29日まで)で歌姫サリ-を演じる。チケットの問い合わせは☎03・3490・4949。



(©Norika Fujiwara)

FIN